



琉球弧の船を知るための10冊 プラス

板井 英伸・選

(一般財団法人沖縄美ら島財団 総合研究センター)

1. 『沖縄の暮らしと民具』上江洲均 (1982、慶友社)

徹底したフィールドワークと文献調査で知られる沖縄の民俗学者の第一人者、上江洲均による一冊。中国航路の進貢船から日用の丸木舟まで、沖縄で使われてきた全ての船の歴史をまとめ、その系統樹を作成している。



沖縄の暮らしと民具

2. 『琉球山原船水運の展開』池野茂 (1994、ロマン書房)

表題の山原船（板井注・馬艦船^{まーらんせん}）だけでなく上江洲均が整理した全タイプの船も取り上げ、それぞれの船の特徴や成立の経緯、使用状況を明らかにしている。島々の多様な船の歴史を概観できる必読の書。



琉球山原船水運の展開

3. 『沖縄船漕ぎ祭祀の民族学的研究』白鳥芳郎・秋山一編 (1995、勉誠社)

船の文化的な側面に焦点を当てた一冊。県内各地のハーリーを網羅的に調査し、記録をまとめている。その事例の多さと分析の細かさは、他の類似する著作をはるかに凌駕する。



沖縄船漕ぎ祭祀の民族学的研究

4. 『潮を開く舟 サバニ一船大工・新城康弘の世界』安本千夏 (2003、南山舎)

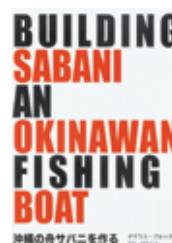
研究者に限らず、サバニに関心を寄せる若者が自ら筆を執って、県内各地の船大工の建造技術や造船にまつわる習俗を詳細に記録している。石垣島・白保の新城康弘のサバニづくりを記録したこの本はその嚆矢と呼ぶべき一冊である。



潮を開く舟 サバニ一船大工・新城康弘の世界

5. 『沖縄の舟サバニを作る』ダグラス・ブルックス (2014、ビレッジプレス)

ダグラス・ブルックスは船大工・著述家で、和船の研究者としても知られている。佐渡島のたらい舟やチョキ舟など日本各地の舟を船大工と共に制作し、その制作方法や構造を記録してきた。この本では伊江島の下門龍仁によるサバニづくりを記録している。



沖縄の舟サバニを作る

6. 『奥武島のサバニ建造技術—地域の手わざの継承と発展』 板井英伸
(2021、一般財団法人沖縄美ら島財団)

南城市奥武島のサバニ建造技術者として県内最高齢である嶺井藤一とその孫の嶺井尚人によるサバニづくりの技を記録している。各地の船大工が高齢化のために次々に引退し、あるいは亡くなられる中で貴重な記録である。



奥武島のサバニ建造技術—地域の手わざの継承と発展

7. 「シンポジウム『サバニの伝統と未来』」『沖縄民俗研究 (24)』(2006、沖縄民俗学会)

サバニ帆漕レースの開催にあわせて、スタート地である座間味島で開かれた沖縄民俗学会によるシンポジウムの報告書。サバニづくりのような民俗技術の継承に何が必要なのか問題を提起し、議論を交わした様子が収録されている。



シンポジウム
『サバニの伝統と未来』

8. 『日本丸木舟の研究』 川崎晃稔 (1991、法政大学出版局)

他の種類の船や他地域の事例と比較することで、特定の地域の、特定の船について理解することができる。同書を読むと、奄美大島の丸木舟・スブネが形態的にも建造法の面でも沖縄のサバニと共通の特徴を持っていたことがよく分かる。



日本丸木舟の研究

9. 『丸木舟』 出口晶子 (2001、法政大学出版局)

先史時代から人類が使用してきた^く刳り船について、その技術の伝承をたどり考察する。丸木舟を大型化する方法が奄美大島以南とトカラ列島以北の間で全く異なっており、北と南がそれぞれ独立した“文化圏”をなしていたことがわかる。



丸木舟

10. 『船の文化からみた東アジア諸国の位相』 岡本弘道編 (2012、関西大学文化交渉学教育研究拠点)

2010 年に開催された国際シンポジウムの報告書である。「船の文化」という切り口から議論を深めるべく、とりわけ船の文化と不可分の存在であった島嶼国家・琉球を中心に、日本・韓国・ベトナムの各地域から専門家を招聘して行われた。



船の文化からみた
東アジア諸国の位相

11. 『環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究』 (2014、国際常民文化研究機構)

環太平洋地域における伝統的船舶製作に関する比較研究を行うと共に、シンボル性の高い船の文化的意義についての考察。造船に焦点を当てると同時に、漁具や漁法、神話や信仰などの検討も行い、海と人間の関係を未来志向観点から取り上げてゆく。



環太平洋海域における
伝統的造船技術の比較研究